

週案プラスNo.34

千駄谷小 校長

次年度の探究的な学びについて その1

さて、いよいよ学習発表会本番です。練習の様も見せていただいています、各学年とっても良くできていますよ！！自信をもって本番に臨ませてください。

話が変わります。学校評価保護者アンケート実施中。先生方の頑張りを知ってくださっている回答が多く、ありがたく感じています。先生たちの努力がちゃんと保護者に伝わっているんだなあ！！ 校長としてとてもうれしいです。

さて、今日のメイン。次年度の探究の取り組みについて。

すでに、本校は、鍋谷先生、高木先生のおかげで、次年度のシブヤ未来科（総合的な学習の時間）の全体計画及び年間指導計画については、区教委に提出済みです。

ある程度、余裕をもって作っていただきましたので、実際に担任の思い・プランも反映できるよう自由度の高い作りに工夫されています。先日、teams&c4th にアップしましたので、ご参照ください。

実際に次年度「探究」を進めるにあたり、まずは、「私たち教員は、いろいろな〇〇すべきという固定観念に縛られ過ぎてはいませんか？」ということ。

例えば、次年度からシブヤ未来科が始まるにあたり、何か新しいことを創っていくべき？（本校の先生は、あまりそれはないかも）あるいは、探究学習なんだから子供たち自らで課題を設定すべき？ 問いも自分で立たせるべき？ プレゼンテーションソフトを使って発表するべき？ などなど

でも、探究には、いろいろな段階があるそうです。右図の通りです。

1 から 4 に従ってだんだんと自由度が高くなっていきます。（高度になっていきます）1 からスタートして 4 を目指すといったイメージになります。

4つの探究のレベル	① 問い	② プロセス	③ 結論
1 確認としての探究 (Confirmation Inquiry)	✓	✓	✓
2 構成された探究 (Structured Inquiry)	✓	✓	
3 ガイドされた探究 (Guided Inquiry)	✓		
4 オープンな探究 (Open Inquiry)			

(出典) The Many Levels of Inquiry By: Randy Bell and Heather Bancchi より和訳

4つの探究について

1 確認としての探究

いうならば探究の初級編 ①の問い、②のプロセス、③の結論も定まっています。例をあげると、教科書に基づいた理科の実験などでよくある、問いも実験手順のテキストで示されており、すでに示された手順を追うようなものです。

2 構成された探究

これは、①の問いや②のプロセスもある程度教師のほうが見通しを立てます。単元を探究のサイクル（※注 1）の中で学ぶため（探究の手順に慣れさせるため）、あらかじめスタート時点である程度デザインされています。「確認としての探究」との一番の違いは、児童が可能な限り探究のサイクルを自分で回せるように、教師は①②の環境設定はするけれど、③の結論は、児童に出させるように仕掛けることです。ちなみに新渡戸文化小学校の探究はほとんどがこれだとお話になっていました。これは、シブヤ未来科で先生たちもやっていますよね！！

3 ガイドされた探究

この段階になると自由度が高くなってきます。こちらは領域や軸はある程度決めておくが、プロセスがオープンであり、子どもたちの興味によってダイナミックに探究が動いていくところが前出の 2 と大きく異なる点です。

4 オープンな探究

これはほとんどの先生方が抱いておられる探究の最終形です。自分で課題を設定 問いを自らで立て、そのアプローチの仕方も子供自身で選択して、結論を導き出すというもの。新渡戸では今年度 3 年生と 6 年生がこれにチャレンジしているという話でした。

続きは次号

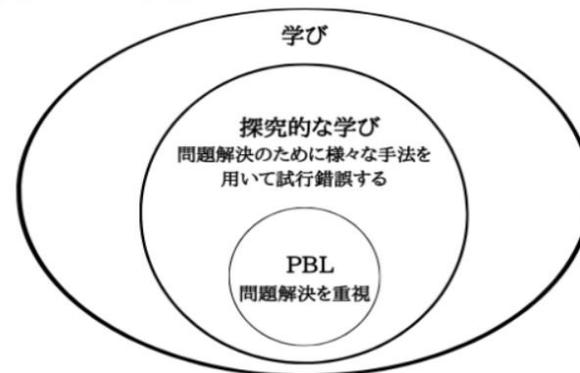
次年度の探究的な学びについて その2

前号で探究の4つのステージまで示しました。続けます。探究といっても様々なステージがあります。幼稚園児に体力向上のためいきなり校庭10周させますか？それは、来年度から、いきなり4のオープンな探究をしようとしているのと同じようなものです。

つまり、児童の実態があり、発達段階もある。それに応じた探究を計画していくということが大切ということです。

誤解を恐れずに言うのであれば、問題解決型学習と探究学習はほぼほぼ同義と捉えて間違いありません。下の図を見てください。

探究学習とPBLの関係



PBLとは Problem Based Learning の略で日本語で問題解決型学習のことを指します。

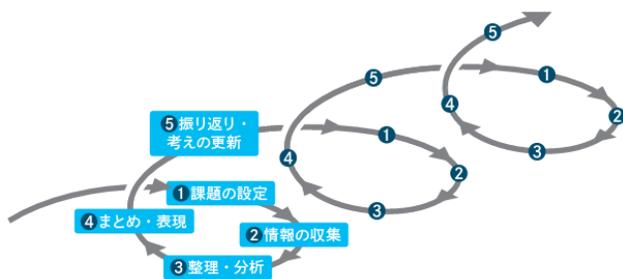
つまり、問題解決型学習≒探究的な学びと言えます。そうなれば、私たちは、平成14年の学習指導要領改訂から総合的な学習の時間が始まり、そして、各教科等でも問題解決学習をしていくことになりました。すでに、20年の年月が過ぎ、各教科等の授業もほとんどが問題解決型学習の要素が盛り込まれている。授業観察で見る授業を見ての私の率直な感想です。

【まとめ】 来年度午後は探究の時間となっていますが、ゼロから作り出すものではないということ。今までの先生たちの実践の中に探究に値するものがほとんどであるということ。ただし、探究学習を導入してその理念である「よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力の育成」という視点を根底に据えるということは大切です。

また、「My 探究」を設定していきますが、必ずしも「4つの探究のレベル」の4段階から始めなければいけないということはないこと。児童の実態、発達段階に即して、最も良い選択を私たちが選択していきましょう。

子供に寄り添うということは、適切な課題を児童に提示すること、そして、児童の力を最大限伸ばすということ。私は、そのように理解しています。

図1 探究的な学習における学習の進め方



※ (前号の) 注1

2年前、本校の総合的な学習の時間の研究発表の研究紀要にも示されている図です。当時研究に参加していた先生は、「ぐるぐる図」って言ってましたね。

探究のサイクル図を上にも示しましたが、本校の総合の研究でやってきたことです。何が言いたいか。それは、まったく新しいことをするということではないということ。繰り返し言っていますが、先生方は、授業の中で探究的な学習をしてきています。それは、授業観察のシートにも示されていることです。